シェークスピヤ作

ギーナスとアドーニス

坪内逍遙譯

目次

序　坪内逍遙　五
緒言　坪内逍遙　七
ギーナスとアドーニス　ウィリヤム・シェークスピヤ　二一
資料　一二五
INTRODUCTION　岡倉由三郎　一二六
沙翁の作品（總論）　横山有策　一三三
飜譯上の用意　坪内逍遙　一三九
反譯者は反逆者　坪内逍遙　一四九
底本について　一五七
参考文献と資料　一五九
改訂版へのあとがき　一六五
第三版へのあとがき　一八二

序

新修に際して、特に言ふほどの事もない。只、例に依つて、先づ、とくと緒言を讀んで、それから、本文を讀まれるやうに、と望んでおく。

此二種の詩篇は、原語では、ところ〴〵、相當に難解に近い箇處があるのだが、邦譯して見ると、案外、わかり易く、ギリシャやローマの神話、傳説からの引き事以外は、特に註釋を要するとも思へない。ところで、神話、傳説の説明は、幸ひにも、例の研究社の『英文學叢書』中に、岡倉由三郎君が極めて深切に物された本兩詩篇の註釋書がある——(詩篇の第二として後に刊行する『ソネット集』の註釋も其中に入れてある)——から、どうかあれを參照することにして貰ひたい。

緒言中にも言つておいた事だが、『ギーナスとアドーニス』の特色は、其思ひ切つてエロチックな題材が、作者が年若であるに似げなく、如何にも冷靜に、綺麗に取扱はれてゐることであり、常識的ではあるが、老成な格言が隨處に點(てん)

綴(てい)されてゐることであり、奇警な、巧緻な比喩が、金砂子を撒き散らしたやうに、使用されてゐることであり、想脈の綿々として、殆ど果てしもなげに、續いてゐることである。東洋の詩や歌を味ひ馴れたわれ〳〵に取つては、あまりにあくど過ぎて、倦(う)み果てるほどである。如何にも濃厚である。人種性の相違、趣味の相違が、脚本なぞに於てよりも、かうした詩篇に於て、一層よく窺はれる。同じ事が『ルークリース』に關しても言はれる。すぐにも讀者たちの心附く事でもあらうが、爰(ここ)に一應注意しておく。

明治廿年前後に、此兩詩篇を初めて讀んで其摸倣を試みた者に山田美妙がある。彼れの『武藏野』は其當時の讀者に比喩の斬新なのを驚かれたものだが、其實、此兩詩篇の比喩を、直譯的に讀んで、眞似たものに過ぎない。ついでだから、ちよつと言ひ添へておく。

昭和九年一月十二日

於双柹舎(そうししや)

譯者

緒言

劇以外の沙翁の作

沙翁（さおう）の作は、脚本三十七篇の外に、詩篇が二册ある。其脚本とても、或作は全部が韵律のある詞章で書かれ、他の作とても律語と散文との混合で、純散文の作といつては、たかゞ、一篇しかないのだが、當時の詞壇で、單に「詩」といふと、それは抒情詩か、叙事詩かを指すのが例であつた。律語で書かれながら「劇詩（ドラマチク・ポエトリ）」と呼ばれてゐなかつたところに、多少の貶意（へんい）が窺はれる。エリザ朝の劇作家らが必ずのやうに「詩」を兼作したのは、一つは詞壇人としての地位を占めよう爲であつたらう。

沙翁の如きも、其出世時代に於ては、盛んに「詩」を作つてゐる。其行數からいふと、六千行にも及ぶのだから、中々の分量で、例へば、ローマの大詩人ヴーヂルの『イニイド』やミルトンの『失樂園』の半分がたよりも多い。又、グレー

やゴールドスミスに比べると、其作の全部以上である。さうして其價値も、イギリスの詩としては、先づ高水準に屬するものだといつて差支へなからう。

詩篇二卷に收められてゐる彼れの作品は次ぎの如くである。

(一)『ヸーナスとアドーニス』 これは一五九三年の刊行が初版で、くはしい事は後にいふが、六行を一解(スタンザ)とする物語歌で、二百〇一解で以て出來てゐる。

(二)『ルークリース』 これは一五九四年の刊行で、七行を一解とする。同じく叙事の詩で、二百六十五解で以て出來てゐる。

(三)『ソネット』 これは十四行體の抒情詩壹百五十四章を集めたものである。これも、いづれ、第二の譯詩篇の緒言で、くはしいことをいふ積りだが、其多くは一五九四年から八年へ掛けて書かれたらうと推測されるもので、其初版は一六〇九年である。

(四)『情婦の歎き』"Lover's Complaint." これは七行の解(スタンザ)四十九解から成立つてゐるもので、「ソネット」の附錄とされてゐるが、果して沙翁の作であるかどうかは聊(いささ)か疑はしい。この作に就いては、「ソネット」の譯の緒言で改めてい

ふことにしよう。
(五)『熱情の香客』"The Passionate Pilgrim." これは別段どういふ聯絡も無い併し戀愛に關する種々の短詩を雜纂したもので、すべてゞ二十一章ある。
(六)『鳳凰と數珠掛け鳩』"The Phoenix and Turtle." これは四行を一解とした短詩十八解だけのものである。

ところで、此六種とも、今では、どの沙翁全集にも收載されることになつてゐるが、飜譯する必要のあるのは、(一)と(二)と(三)とだけであらう。『情婦の歎き』の事は、他の緒言でいふことにして、(五)と(六)との事だけをいはうが、『熱情の香客』は、全章の五分の一弱以外は沙翁の作でないとせられてゐるのみか、其五分の一弱さへも『ソネット』中に見えてゐるもの及び『戀の骨折損』中の十四行詩の第一稿かとも見られるものである。もつとも、右の比例に關しては、沙翁學者間に、多少の異論はある。けれども、大體に於て、沙翁の作が其四分の一强に上らないことは慥かであるといつてよい。つまり、第一首から第五首までは、明かに沙翁の作だが、――但しそれは『ソネット』か『戀の骨折損』かに載せられてある――其他の多數は、或ひは作者不明、或ひは幾

何かは同時代の他の詩人リチャード・バーンフィールドやバーソロミュー・グリフィンやトマス・デロニーらの作だと殆ど確定されてゐる。だから、邦譯するのは殆ど無要であらうと思ふ。といふのは、原詞のまゝならば、初稿と後の稿との比較研究上に多少の用もあり意義もあるが、初稿の“unskilful”が後稿に“unlearned”となつてゐようと“false forgeries”が“false subtleties”になつてゐようと、或ひは句作りや語の位置などが多少變つてゐようと、邦譯して見ると、何が何やら全く解らなくなることが多いからである。

『鳳凰と數珠掛け鳩』は、或ひは沙翁の作に相違ないかも知れない。が、これはもとロバート・チェスターの作の“Love's Martyr, or Rosalins Complaint”の附錄として公けにされたもので、其附錄にはベン・ヂョンソンやチャプマンやマーストンのも併(あわ)せて收められてゐたといふことで、至つて眞意の探りにくい、又、到底、推測のしやうもないらしい一種の譬喩(ひゆ)詩で、而も頗(すこぶ)る小品で、沙翁の作としては、特に珍重すべき程のものでない。(一説には、女王エリザベスを鳳凰に擬し、エセックス侯を鳩に擬して、其關係を咏じたもの、云々。)『ギーナスとアドーニス』なぞで彼れの詩名が俄かに高まつた當時とて、こんな斷篇をすらも、出

販書肆(しよし)共が爭つて其宣傳に利用したのではあるまいか？

以上の理由で、私は此篇には『ギーナスとアドーニス』と『ルークリース』とだけを收め、第二の譯詩篇には、『ソネット』だけを收めることにした。

『ギーナスとアドーニス』

此作が當時の書籍出版業組合の登錄簿に初めて記入されたのは一五九三年の四月で、印刷者は作者と同鄕のリチャード・フィールド、出版者はハリソンといふ者であつたが、一五九六年以後はウィリヤム・リークといふ者が其版權を讓り受けて、作者の死後まで保有してゐた。非常に歡迎された出版物であつた證據には、一六一六年までに、即ち二十二三年間に、既に六版を重ね、作者の死後——即ち一六一六年より同七五年までに——にも七版、都合十三版にまでも及んでゐる。しかも是等の古版本の現存してゐるのは僅かに二十一部しかないといふ

ことであるのによつて、實際、それが賣れたばかりでなく、善く讀まれたらしいことが解る。詩人としての沙翁の名が忽ち詞壇に高くなつたのは、其劇によつてゞはなく、此れと『ルークリース』の力であつたことは、當時の詞人間の評判が證明してゐる。とりわけ、『ギーナスとアドーニス』の好評は種々の模倣作、類似作を輩出せしめた。

初版の題扉（とびら）は、此譯本のそれの通りで、ラテン詩人オギッドの『戀の歌』からの二句が添へてあるばかりで、作者の名は書いてない。が、次ぎのページのサウサムトン伯への獻呈の辭の末には明かにウィリヤム・シェークスピヤと署してあり、特に「野生が空想（インヹンシヨン）の第一子（第一の創作）」と斷つてある。（右のラテンの詩句をマーローも英譯し、ベン・ヂョンソンも英譯してゐる、で、其二つを逐語的に邦譯しておいた。括弧內のがヂョンソンの譯である。）サウサムトン（或ひはサヾムトン）伯ヘンリー・ローテスリー（或ひはロツリー）は、當時二十歲、有名な文學藝術の保護者で、名門でもあり、容姿の端麗な風流才子でもあつた。此貴公子の事に就いては、いづれ『ソネット』の譯の緒言の中で詳說せねばならない理由があるから、今は總て省いておく。

「野生が空想（インヹンション）の第一子」といふ語のあるところから、或ひは之れを以て沙翁の全くの處女作だとして、多分まだロンドン市に出て來なかつた比に起稿したものだらうと臆斷して、作中の處々に見出だされる花、鳥、獸等に關する「自然」の描寫は蓋（けだ）しストラトフォード附近の山野の印象を錄したものだらうといふ風に推論する評者もあるが、又一方には、當時空想（インヹンション）（創作）といふ語は主として抒情又は叙事の詩――卽ち純粹正格の詩――にばかり適用され、時に散文を混用したり、舊作（きゆうさく）を改修したりする劇詩には適用せないことになつてゐたのであるから、前記獻呈辭中の「空想の第一子」といふ語は、決して普通謂ふ處女作を意味するのでなく、「自分が初めて眞面目に努力して書いた又は公けにした作」といふことだと論ずる者もある。後者の然（そ）う主張する所以は、第一、此作の主題は極めてエロチックで、たとひ天才の筆であつても、丁年（ていねん）未滿なぞだと、勢ひ猥雜に流れないわけにはいかぬ筈だのに、描寫も觀察も非常に老成で、ハズリットが此作と『ルークリース』とを「一對の氷室」と評した程に冷靜である點が、どうしても初心者の作でなく、殊に、青年の作らしくないといふのに在る。人生の觀察、世故の經驗、情の練磨、學殖、落附いた筆致、どの點

から見ても未熟な跡はなく、すべての上に自制が行屆いてゐる。强烈に感じもするが沈著に考へもする人の作だといふことが、讀むうちに自然と認められる。其出版の年（一五九三年）には作者が二十九歳だが、やはり其比（そのころ）の筆になつたものであらうといふのである。但し、故シドニー・リーの如き斯學の大家でさへも、此作を「青年期の物らしい、讀む者にアドレセンスの印象を與ふ」といつてゐるから、一概に斷定するのは早計でもあらうが。

　此作の韻律は、當時イギリス及びフランスの詞壇では、叙事の詩——物語歌——の定例的形式のやうになつてゐたもので、一行（一句）が同拍節の十音より成つてをり、それを先づ四行（既ち四句）づゝ隔行に押韻して所謂四行體（クヲートレン）に組み立て、更に押韻した二句——聯句（カプレット）を添へて、都合六行（既ち六句）とし、それを一解（スタンザ）として連吟式に綴つてゆくといふ一種の詩體なのである。圖（ず）にして見ると、ababcc となる。この體をイギリスで最初に使用したのは例の『仙女王（フエヤリ・クヰン）』で有名なエドマンド・スペンサーの作『アストロフェル』だといふことであるが、多分、沙翁は之れを其先輩トマス・ロッヂといふ作者が其作『シリース・メタモアホーシス』で使つてゐるのを讀んで、それに倣（なら）つて試みたのであらう

といふ。といふのは、題材や取扱ひ方までも、双方幾らか相類似してゐるからである。

概評

「愛」の女神、ヸーナスが美少年アドーニスに戀慕すること及び其アドーニスが野猪のために落命に及ぶことは古神話である。で、早く既にローマの詩人オヸッドの名篇『メタモアホーシス』(變態譚)中の挿話として、廣く世に知られてゐたが、アドーニスがまだ世心知らぬ少年であるために、ヸーナスの戀をさげすみ、之れを厭惡(えんお)して、すげなく排斥するといふ筋は、後世の作家の創意であるといふ。沙翁の此篇は此後世の翻案を取入れたものであるが、同時に『メタモアホーシス』中の他の一話――即ちまだ戀を知らぬハーマフロダイタスといふ少年がサルマシスといふ一處女に言ひ寄られて却つて嫌惡を感じ其戀を排ける話――を素材として筋を立てたものであるらしい。題材其物は如何にも

青年詩人の擇びさうな、思ひ切つてエロチックなものである。戀愛の權化として、妖艷の精靈として、何等の檢束(けんそく)をも蒙らない、放逸な、淫蕩な女神ギーナスが、春の野外で、一美童を抱擁して、熱烈なる肉の戀を語り、其心に從はしめやうとするといふ筋である。其間に盛り心の附いた牝牡(ひんぼ)の馬の振舞の描寫なぞもある上に、隨分きはどい風情や形容も少くないから、作者の態度次第、又、其措辭上の用意次第で、讀みぐるしい淫猥な、穢(きた)ならしい作ともなりかねないものであるのだが、不思議にも水晶に彫刻した裸體の抱擁像などを見る時のやうに、寧(むし)ろ美しい、冷たい、清らかな感じを覺えさせられる。ハズリットが此作と次ぎに語る「ルークリース」とを評して「一對の氷室」だといつたのは、必ずしも言ひ過ぎではない。畢竟(ひつきょう)、此二作は姉妹篇で、共に其主題を古典から得、それに對する作者の態度も全く同一で、研究的、客觀的であつたらしい。古い題材を藉(か)りて、自家の若々しい實感を披瀝しようといふ抒情的態度から作したのではなく、古い著名な話柄を成るべく客觀的に、但し其措辭や構想の上には、十二分の新意を發揮して、新詩人としての創才を世に示さうと力(つと)めたものらしい。『ギーナスとアドーニス』と『ルークリース』とが共に古典にもとづいた物

語詩でありながら、例へば、ミルトンの『ラレグロ』と『イル・ペンセロソ』との如く、其内容が著しく對照的となつてゐる點にも、其用意の程が窺はれる。前者では、女が放逸淫蕩で、男が童貞的であり、後者では、男が無慚淫虐(むざんいんぎゃく)であつて、女が貞潔であり峻嚴である。總體に、『ルークリース』では道德的調子が高められてをり、詞致の上にも嚴肅味が加はつてゐる。前者は純然たる藝術本位の立場から書かれたものらしく、不道德ではないまでも無道德であるが、後者は其措辭が巧緻を極めてゐるにも拘らず、明かに一種の敎訓詩である。

　獻呈辭には、「かゝる蕪雜(ぶざつ)なる詞章」とか「蕪拙取るに足らず」とかいふ謙辭が繰返してあるが、これは寧ろ當時の慣例と見做すべきである。作者の初期の諸脚本などに比べると、遙かに磨きが掛かつてゐる。寧ろ彫琢刻鏤(ちょうたくこくる)に過ぎて、あぶなく硬固(ぎごちな)くならうとしてゐる。全體の調子が、油繪的ではなく、寧ろ彫刻のやうに、冷たく感ぜられるのは、一つは此刻苦の跡が何となく目に附くからであらう。

『ルークリース』

此作は『ギーナスとアドーニス』出版の翌年即ち一五九四年の三月に刊行されたが、出版書肆組合の帳簿には「ルークリースの强辱と題したる書」と記入された。印刷者はやはりリチャード・フィールドである。

筋は、作者自身の筋書に見えてゐる通り、古ローマの淫虐な王子タークヰンが貞婦ルークリースを暴力を以て辱めたゝめ、貞婦は自殺し、其結果、其夫らが憤激して兵を擧げ、王政を顚覆し、ローマに共和制を布くに至るといふ古史譚にもとづいたものである。が、其事の次第を叙説し、其場の模様を描寫し、其人物の態度、風采を形容し、各自の感想を詳述し、兼ねて作者自身の批判や教訓や感慨を披瀝するに當りては、飽く迄も創意を凝らし、其蘊蓄と技巧とを傾けてゐる。『ギーナスとアドーニス』の獻呈辭中で「あらゆる間暇を利用して、更に優秀なるものを勞作し」云々と其大檀那たるサウサムトンの伯に豫約をした結果の作だけに、たしかに其學、識、見に於ては前作に勝ること一等であるといへる。且つ其作意も調子も一層嚴肅であり莊重であ

るが、餘りに形容が巧緻で、岐路枝葉の叙說や描寫が精細過ぎるので、肝腎の本筋が容易に進捗せず、繁縟（はんじょく）で、隨つて感興が弛緩する。就中（なかんずく）、「時」と「機會」とを對象としての述懷が百三十三行、トロイ落城の畫面の說明が二百〇二行なぞは冗漫に過ぎる。是等の缺點や曲調の美、自然の詩趣なぞからいふと、『ギーナスとアドーニス』ほどには整つてゐない作だといはねばならぬ。けれども其調子の嚴肅なのと作意の教訓的である爲の故に、若い者達が『ギーナスとアドーニス』を狂喜して讀み耽つたと同程度に、此作は老成人らに歡迎され、激賞されて、作者の名をして忽ち當代に高からしめたといふ。

『ルークリース』のヒントは、やはり、一部はオギッドの作からであらうが、又一部はチョーサーの『善女物語（リヂエンド・オブ・グッドウイメン）』乃至サミュエル・ダニエルの『ロザモンドの歎き』なぞからも得たのであらう。それから彼のウィリヤム・ペインターの『快樂殿（パレース・オブ・プレジユア）』といふ說話集中（のローマ史譚の中）にも此作の原話は收められてゐる。

此作の韵律は『ギーナスとアドーニス』のよりも自由であり、奔放である。やはり、前四句を隔行に押韵して、最後の二句を相聯（あいなら）べて押韵してゐるが、其

聯句(カプレット)と前の四句との間へ、更に一句（一行）を挿入して第四句と同韻にした點――即ち ababbcc とした點――だけが『ヸーナスとアドーニス』と異(ちが)つてゐる。すなはち、一解は七行（七句）である。此律は、本來フランスの詞壇で行はれてゐたものを、先づチョーサーが其作『トロイラスとクレシード』に適用し、つゞいてダニエルが其『ロザモンドの歎き』に使用して好評を博したものだといふ。

於余丁町(よちょうまち)

譯者

昭和二年十一月下旬

鄙夫（ひふ）は劣作にも跪（ひざまづ）かむ。吾れには、輝く日神よ、
飲ましめよ伎藝神の泉を酌みたゝへたる杯を
ヂヨンソン譯

ギーナスとアドーニス

才思の陋（いや）しき者は醜かる物をもめでたしとも見よ。
麗しき日の神よ、吾をば伎藝神の原泉にしるべせよ。
マーロー譯

サウサムトンの伯兼チッチュフィールド男

ヘンリー・ローテスリー閣下に

閣下、

失禮を顧みず、斯かる憮雜なる詞章を獻上仕り候はゞ、如何なる御不興を蒙り候はむか、又、斯かる小弱なる物の爲に斯かる強大なる支撑（しとう）を相擇び候ふ事を世人が如何に批難致し候はむか、承知仕らず候へども、若し幸ひに閣下が只をかしとだに御覽下され候はゞ、野生はそれを以て非常の光榮と存じ奉り、あらゆる間暇を利用して、更に優秀なるものを勞作し、以て改めて敬意を表し奉らむと存じ候、併（しか）しながら、若し此、野生が空想の第一子にして、所詮、不具者に外ならぬやうに候はゞ、かゝる尊貴なる教父を煩はし奉り候ひし事を物體もなき儀と後悔仕り、斯かる惡收穫を再びせざらむ爲に、

向後(きょうこう)、又とは斯かる荒蕪地を耕し申すまじく、一に之れを閣下の御高閲に任せ奉り候、さて閣下には野生の常に祈願し奉り居り候ふ如く、何事に關せられ候うても、御自身御願望あらせらるゝ通り、又、世人が囑望し奉り居り候ふ通りに、十分御満足遊ばされ候ふやうにと念じ奉り候、

恐惶謹言

閣下の臣僕

ウィリヤム・シェークスピヤ

ギーナスとアドーニス

韓(から)くれなゐの面(おも)わ有(も)たる太陽(たいやう)が、今(いま)しも
打濡(うちし)める朝(あさ)けに立別(たちわか)れしばかりなるに、
薔薇(ばら)色頰(いろほゝ)のアドーニスは早(はや)も獵(かり)に出(い)でつ。
彼(か)れは獵(かり)をこそ戀(こ)ひぬれ、戀(こい)をば蔑(さげす)みぬ。
　思(おも)ひ惱(なや)めるギーナスは、疾(と)く其後(そのあと)を追(お)ひて、
打附(うちつ)けに憚(はゞか)る色(いろ)もなく、斯(か)くは言(い)ひ寄(よ)りぬ。

「わなみよりも遙かに〱麗しき汝よ、
たぐひなく懷かしき夏野邊の花の司よ、
なべての女神を醜く見する、男には過ぎたる美よ、
鳩よりも白くして薔薇よりもくれなゐなり。
　『自然』も、汝を造るためには、自ら苦闘せりき。
　いひけらく、汝あらずならば、世も亦た盡きむと。

「いみじき〱汝よ、願はくは疾く降立ちて
その駒の頭をば鞍の前輪に繫ぎとめよ、
さばかりの惠みを賜べ、われ其報いに
千萬の蜜做す祕事をおことに敎へむ。
　いざ爰へ來て坐りね、曾て蛇の鳴かぬ處ぞ。
　坐りなば、われ汝の息の塞るほどにキッスせむ。

「しかるも汝の脣に飽き厭ふ心をば起させじ、
むしろ彌〻充ち足りて更に彌〻飢ゑを覺えしめむ、
吸ふたびに脣を赤くもし白くもし、變化あらせて。
十のキッスも一つの如く短く、一つのキッスも二十の如く長からむ。
　長き夏の日も只束の間とも思はれぬべし、
　時の經つを知らぬ斯かる戲れに過しなば。」

斯くいひて女神は、强健の證とも見べき
アドーニスの汗ばめる掌を搔い摑みつ。
さて情熱のために戰きながら、そを香油と呼びぬ、
女神をも裨益する下界のこよなき藥膏と呼びぬ。
　斯く猛り立ちて、情慾の與へつる力もて
　勇敢にも男をば其馬より引きおろしぬ。

一つの腕の先きは逞しき駒の韁を取りて、
次ぎの腕の下にはかよわき少年を掻抱けり。
少年は顔を赧らめ、ふくらませて、不興げに見えぬ、
あざれて遊ばむ慾などは些なかりければなり。
　女は赤く熱くなりて、然ゆる火の石炭の如し、
　男も恥ぢて赤くなりぬれど、霜の如く冷やかなり。

さて釦飾りの附きたる韁を瘤立てる木の枝へ
女神は手早く結びとゞむ――あゝ、機敏なる戀や――
駒は既に繋がれつ。今や女神は
其乗主をば捕縛せむとはすなり。
　すなはち、つと後方へ押倒しぬ、彼女こそ然さるゝを欲りすれ。
　さて力任せに抑へ附けつ、淫らごとの爲にはあらねど。

彼れの打倒れしや女神も其傍らに臥しぬ、
共に、肱と腰とをもて其身をさゝへつゝ。
今し女神は男の頬を撫づ、男は皺ぐみて、あはや
叱り罵らむとす、女神其口を脣もて塞ぎて
　キッスして言ふ、好き心の爲に打喘ぎながら、
「叱り罵らむとせば、いつまでも此脣を開かせじ」と。

彼れの面は燃えぬ、羞ぢ恥ぢて。女神は涙もて
先づ其童貞做す頬の炎を消しつ、
さて風做す太息と黄金做す頭髪もて
吹きもし煽ぎもして涙の痕を乾さむとす。
　彼れは女神の振舞を淫らなりと罵りつゝ、又も
何をか言はむとするを女神はキッスもて壓殺しぬ。

飢(う)ゑたる鷲(わし)の、物食(ものく)はぬためにいや猛(たけ)くなりて、
翼(はね)をも肉(にく)をも骨(ほね)をも嘴(はし)もて啄(つゝ)きて、
滿腹(まんぷく)するか餌食(ゑじき)のあらずなるかまでは、
翼(つばさ)を搖(ゆ)りつゝ、いそがしく貪(むさぼ)り食(く)ふが如(ごと)くに、
その如(ごと)くに、女神(めがみ)は額(ひたひ)を、頰(ほゝ)を、頤(おとがひ)をキッスし、
キッスし終(を)はれば、又(また)、はじめに戻(もど)りてキッスす。

從(したが)はむ意(こゝろ)はなけれど、抗(あらが)はむ術(すべ)もなくて、彼(か)れは
打(うち)あへぎつゝ、臥(ふ)して、女神(めがみ)の面(おもて)に息(いき)す。
女神(めがみ)は其湯氣(そのゆげ)をうまし生餌(いきゑ)とも喜(よろこ)び食(は)みて、
神々(かうぐ〱)しき濕(うるほ)ひよ、天福(てんぷく)の戰(そよ)ぎよ、と呼(よ)ぶ。
願(ねが)ひけらく、あはれ、わが頰(ほゝ)、花咲(はなさ)き滿(み)てる園(その)となりて
每(つね)に其花(そのはな)どもを斷(か)かるいみじき雨(あめ)に濡(ぬ)らさましをと。

見よや、小鳥が網に捉はれたらむ如くにも
女神の腕にアドーニスは掻抱かれたり。
恥づかしさに、又抗はむ力無きわが怯さに苛ちて
憤める目附いよゝうつくしかりき。
　水量滿てる河に雨降らば、
　勢ひ岸にあふれざらむや？

尙ほも女神は乞ひ祈りぬ、いとも〳〵いみじうなむ、
いみじき人の耳にふさふべく其言葉を巧みにして。
尙ほも彼れは憤みてをり、尙ほも顰み怒りてをり、
恥ぢては血紅色ともなり、怒りては灰青白ともなりて。
　赤ければ、女神は越なくめぐしがりぬ、白ければ
　其越なき人いよゝ麗しく成りまさると思ひぬ。

ヴィーナスとアドーニス

発行日　二〇二〇年　十二月二十四日　第三版
　　　　二〇一四年　十月二十日　初版
発行者　フュゼ
発行所　434-0031 浜松市浜北区小林 450–1
原作　ウィリアム・シェイクスピア
和訳　坪内　逍遙
編者　松下　健治
印刷製本　株式会社ブックフロント
　　　　176-0012 東京都練馬区豊玉北 6-13-3 上野ビル 4F

FUSÉE　http://www.cam.hi-ho.ne.jp/kenjim2/

©2020 Matsushita Kenji, all rights reserved.　Printed in Japan.

ISBN978-4-908795-08-4　C0097　Print on Demand